

# 現代プラグマティズムの問題構制

—真理と正当化をめぐるハーバーマス—ローティ論争—

加 賀 裕 郎

## I プラグマティズムの系譜におけるローティとハーバーマス

スリーパーが指摘するように、「観念論の二つのドグマ」、つまり外的でヌーメナルな世界と内的で現象的な世界を峻別することと、それらを橋渡しするために超越論的論証が必要だとすることを成分とするドグマが、19世紀の欧米思想界を支配した。<sup>(1)</sup>アメリカ・プラグマティズムにおいてこのドグマは、W. エマソン、C.S. パース、J. ロイス、C.I. ルイスからパトナムへと続く伝統に、その跡を辿ることができる。他方20世紀の初頭、このドグマを払拭しようとする動きが胎動した。それは幾つかの实在論の潮流から形成されていた。ボード(B.H. ボード)は、この時期の英米哲学界における实在論の潮流を、大きく4つに区分した。<sup>(2)</sup>すなわち(1)ロックからホブハウスに至る实在論、(2)ムアの实在論、(3)ウッドブリッジのアリストテレス主義的实在論とモンタギューの新实在論、(4)プラグマティズム、である。これらのうち、ここではプラグマティズム的实在論の潮流に焦点を定める。

では「観念論の二つのドグマ」を克服しようとするプラグマティズムの源流は何処にあるだろうか。その一つがジェイムズにあることは明らかである。「観念論の二つのドグマ」を克服しようとする運動は、絶対観念論の代表者であったロイス批判として出発するが、その批判者であるペリーやモンタギューは、かつてジェイムズの教え子であり、彼らがジェイムズの講義に影響されつつ観念論批判の構想を練ったことは、ほぼ間違いない。<sup>(3)</sup>彼らが聴講した講義は、後にジェイムズの『根本的経験論集 (*Essays in Radical Empiricism*)』(1910年)に

所収される諸論文の原型をなしたものと推察されるが、そのなかでジェームズは自然的実在論 (natural realism) を展開しつつあったのである。もう一つの源流はデューイにある。マウンスはジェームズよりも、むしろデューイにその源流を見出している。<sup>(4)</sup>若きデューイは新ヘーゲル主義的観念論者であったが、次第にそこから遠ざかり、20世紀の初頭にはプラグマティックな実在論ないし自然主義的実在論 (naturalistic realism) の立場に向かいつつあった。ジェームズとデューイを源流とする自然主義的プラグマティズムの系譜は、クワインからデイヴィドソン、ローティへと辿ることができる。

筆者はかつて自然主義的プラグマティズムの系譜という視角から、パースからパトナムに至る非自然主義的プラグマティズムと、ジェームズとデューイからローティに至る自然主義的プラグマティズムを比較検討したことがある。<sup>(5)</sup>そのなかで、二つの系譜の現代における各々の代表者であるパトナムとローティの、「真理」と「保証された主張 (warranted assertion)」概念をめぐる論争を検討した。彼らはともにプラグマティズムの基本的主張を受け入れながら、最終的に袂を分かつ。彼らの相違は、パトナムが「保証された主張」の客観的基準を認めるのに対して、ローティはそれを否定し、「保証された主張」の唯一の基準を対話的な基準に、つまり人物  $p$  の言明  $S$  を、 $p$  の仲間集団に対して正当化できるか否かに置く。パトナムから見れば、ローティは救いがたい相対主義者であり、ローティから見れば、パトナムは相対主義に脅威を感じるあまり、プラグマティズムから逸脱している。<sup>(6)</sup>

彼らの相違を一般化すれば、次のように言えよう。パトナムは内在主義 (internalism) の立場に立ちながら、なおそこから超越の可能性を見ようとし、そこに今日における「実在」、「理性」、「合理性」、「真理」などの意味を見出そうとする。いわば「内在的超越」がパトナムの基本的立場である。しかしローティは内在と超越などという区別を認めず、パトナムがなお意味を見出そうとする諸概念を廃品処理に回そうとする。ローティによれば、パトナムはなおアーペルーハーバーマスの「普遍的妥当要求」が可能だと考えているが、その考えはローティにとって「他のあらゆる種の動物とまったく同様なローカルで

移ろいゆくものとしての自己像（つまり我々，感傷的なりべラル）」<sup>(7)</sup>で実験してみるとという刺激を与える点でだけ意味があるに過ぎない。

プラグマティズム内部における内在的超越主義とそれを否定する立場との対立は，プラグマティズム内部にととまらず，プラグマティズムと批判理論の間にも見ることができる。小論では内在的超越主義とその否定という対立図式を，プラグマティズムと批判理論のうちにも確認するとともに，その対立図式を乗り越えるための道筋を瞥見する。

小論で取り上げるのは，ローティとハーバーマスである。ハーバーマスは現代ヨーロッパにおいて，プラグマティズム——とくにパースとミード——の影響を最も強く受けた思想家といえるが，最終的に「準—超越論主義（quasi-transcendentalism）」、いわば「弱いカント主義」に留まる。この点で，カント主義的プラグマティストともいえるパトナムと思想的親近性が認められる。<sup>(8)</sup>他方ローティは，現代アメリカにおいてニーチェ，ハイデガーからポストモダニズムに至るヨーロッパ思想の影響を最も強く受けた思想家であり，ニーチェをヨーロッパ版プラグマティストとして解釈しさえする。<sup>(9)</sup>以上の概観は，プラグマティズムとの関わりの点で両者の思想的親近性を窺わせるが，他方で「思想的ねじれ」を示している。というのは，ローティが影響を受けたヨーロッパ思想の系譜は，ハーバーマスには受け入れ難いものであり，他方ハーバーマスが影響を受けたパースはローティの評価が低いプラグマティストだからである。<sup>(10)</sup>両者の相違を端的に言えば，ハーバーマスが理性と合理性の最後の砦を死守しようするのに対して，ローティは人間的自由のために，ハーバーマスが死守するもの——ローティにとって，それは権威主義の別名である——を解体する，ということである。

## II ローティのハーバーマス観／

### ハーバーマスのローティ観

ローティのハーバーマス観とハーバーマスのローティ観を寸考してみよう。先ず前者についてだが，ローティは主観中心的理性からコミュニケーション理

性への転回という、ハーバーマスの哲学史の見取り図を基本的に受け入れ、所謂「言語論的転回 (the linguistic turn)」を、ハーバーマスの見取り図の中に位置づけようとする。すると「言語論的転回」は「語用論的転回 (the pragmatic turn)」を意味することとなり、「世界を構成する働きは、超越論的主観性から文法構造に」移行する。両者にとって対話的状况が究極的与件となり、その背後に自己意識の確実性に基ついた非歴史的制約があることは否定され、したがってまた「座席場所指定者 (Platzanweiser)」と「裁判官 (Richter)」としての哲学は否定される。というのは「文化はどんな根拠づけも、どんな序列づけも必要としない。つまり文化は18世紀以来の近代において、マックス・ウェーバーがエミール・ラスクとともに文化的価値領域 (kultuerelle Wert Sphären) として目の当たりにし、記述した合理性の構造を自己自身から生み出した」<sup>40</sup>からである。この主張にもローティは同意するはずだ。

しかしローティとハーバーマスの一致は、ここで終わる。ローティはハーバーマスとポストモダン論者の中間に自らを位置づけようとする。<sup>41</sup>フーコーがリベラルであろうとしないアイロニストであり、ハーバーマスがアイロニストであろうとしないリベラルだとすれば、ローティはリベラルであるとともにアイロニストであろうとする。アイロニストとは、自分が現在使う終局的ボキャブラリーを常に疑う人、それを非人称的な大きな力——例えば神、実在、理性、合理性——によって正当化しようとする人である。現在の終局的ボキャブラリーは不断に再記述され、増殖する可能性に開かれている。フーコーはこの種のアイロニストであるが、反面、近代のリベラルな社会にはアイロニストであることを阻害する規律=訓練システムが張りめぐらされているとみなす。それに対してハーバーマスは、近代のリベラルな社会を肯定すると同時に、それは意識哲学が供与するほどの堅固さをもたないが、ある種の合理的正当化が可能だとみなす。アイロニストは理性や合理性を単なる詩に還元しようとする非合理主義者であるとして否定される。これに対してローティは、いっぽうでポストモダニストとともにアイロニストであろうとするが、ハーバーマスとともに、近代のリベラルな社会を肯定する。つまり政治的に両者は同じ立場に立つ。し

かしハーバーマスが感じている、リベラルな社会を正当化する必要性を、ローティは感じない。リベラルな社会にはどんな深い基礎もない。では如何にしてリベラルな社会は肯定されるのか。それは単に、我々が「グローバルな平等主義的ユートピア」<sup>93</sup>を胚胎した伝統のなかで育まれたからに過ぎない。リベラルな社会とは、このユートピアを不断に膨らませる社会であり、その過程にはどんな外的制約もない。では如何にしてアイロニストであることとリベラルであることが両立するのか。それは公私の完全な論理、バーンスタインのいう「アパルトヘイトの論理」<sup>94</sup>によってである。つまりアイロニストは私的領域において不断に自己創造する人であり、リベラルとは社会のすべての人びとが私的領域で自己創造を行うことを推奨する人である。

ローティとハーバーマスの相違は、端的には、次のように言ってよいかもしれない。現代哲学における語用論的転回の結果、究極的与件は我々の対話的状况になった。その状況を支えるどんな意識哲学的基礎もない。ローティは、この対話的状况を徹底して、脈絡主義的、唯名論的に、あるいは「厚い (thick)」仕方で捉える。つまりローティがその一員であるような社会は、幸運にも「グローバルな平等主義的ユートピア」を胚胎した社会である。その社会は「真理」とか「合理性」という語彙によって正当化されはしないが、ローティを含む「我々リベラル (we-liberal)」は連帯しつつ、このユートピアをいっそう膨らませることにコミットすべきである。これに対してハーバーマスは、近代のリベラルな社会が、ある種の正当化を必要とするとみなす。もし正当化が欠如しているならば、リベラルな社会が、例えばナチスより優越しているとは言えなくなる。ハーバーマスは、その正当化の根拠を、我々が置かれている対話的状况の脱脈絡的理想化に求め、その理想化のうちに真理と合理性が胚胎するとみなす。そうした理想化は、意識哲学のように自己意識の確実性を基礎にしてアプリオリに正当化されるわけではなく、現実の対話的状况の可能性として設定されるのであり、その導出に当たっては、哲学と経験諸科学——例えばコールバーグの心理学的な道徳性発達理論——との共同作業<sup>95</sup>が必要である。もしこうした準超越論的な正当化が欠けているならば、まったくの相対主義が帰結する。

以上のようなローティとハーバーマスの比較が妥当だとすれば、ハーバーマスがローティを厳しく評価するのも頷ける。というのはローティからすれば、ハーバーマスの主張から哲学的正当化を差し引きさえすれば、二人の立場は一致するが、ハーバーマスからすれば、哲学的正当化の欠如したりベラリズムは、バーバリズムと選ぶところなくなるからである。ハーバーマスのローティ解釈は、次の文章に典型的に示される。

〔ローティにおいては〕言語学的なものへと向きを変えたニーチェ的パトスが、プラグマティズムの分別ある洞察をいかに煙に巻いた(vernebeln)かが分かる。ローティがデザインした像においては、言語的な世界開示という革新的過程は、世界内的実践の実証過程において、どんな抵抗ももたない…世界内的実践は、その都度生起する脈絡の地平を超え出ていこうとする妥当性要求から、その否定的力(Negationskraft)を引き出す。しかし生の哲学を負荷した脈絡主義的言語概念は、コミュニケーション行為の理想化する諸前提において有効になる、事実上抵抗するという事実的力に感応しない。それゆえデリダとローティはまた、ディスクルス固有の位置づけ、つまり日常的コミュニケーションから分化し、その都度の(真理や規範的正しさという)妥当性の次元、その都度の(真理問題や正しさの問題という)問題構制に合わせて作られたディスクルス固有の位置づけを見失う。<sup>69)</sup>

この文章に見られるように、ハーバーマスはプラグマティズムを評価する——主としてパースにおける哲学の記号論的転回や探究共同体の理論、ミードの社会的自我の理論——が、ローティはその洞察を、一切の深い基礎つまり本質を欠いた人間による、言語的な美的自己創造というニーチェの変種に墮落させたと捉えている。ハーバーマスにとって、生活世界におけるコミュニケーション行為から、異なった妥当性の次元と問題構制をもつ領域が分化し、各領域についての理想化的反省から、各領域の客観的妥当性の基準が確定される。とこ

ろがデリダとローティは、そうした基準を解体してしまうので、世界内的実践は「否定的力」を失って、「ニーチェ的パトス」に身を委ねることになり、結局「詩的言語機能 (die poetische Sprachfunktion)」<sup>97</sup>が突出してしまう。

### Ⅲ 現代のハーバーマス—ローティ論争

これまで我々は、ローティとハーバーマスの基本的な対立構図を検討してきた。この構図は、現代においてどのような展開をとげているのだろうか。近年、彼らは活発な論争を繰り広げており、その対立は、「理性」「合理性」「真理」「正当化」といった古典的な哲学概念の維持可能性をめぐる、ぎりぎりの攻防という様相を呈している。我々は以下で、なぜ「ぎりぎりの」攻防なのかを考察する。その意味が明らかになれば、現代における哲学的課題もまた明らかになるであろう。

(1)まず「理性」と「合理性」について。近代哲学における「理性」概念の変遷の見取り図を大まかに描くと、次のようになるであろう。まずデカルトとともに理性は Ch. テイラーのいう「実体的理性」から「手続き的理性」へと変化する。<sup>98</sup>つまり理性は実在の本性に基づいて規定されるのではなく、自らの内的な合理性基準を獲得する。実在から自律した理性は、やがてカントとともに物自体を認識することではなく、可能的経験の制約を設定する能力へと弱体化する。しかしそれはなお、自己意識の确实性に基づいて、世界の可能性をア priori に設定する能力であり得た。しかし20世紀において、このような「理性」概念はもはや維持できなくなった。この認識に寄与したのは、ディルタイからハイデガーに至る解釈学的伝統とパースからデューイに至るプラグマティズムの伝統である。例えばハイデガーにおいて、主観は世界を企投する主観性として超越論的機能を保持するが、それ自身は世界内存在として、世界のうちに、したがってまた歴史のうちに埋め込まれているし、プラグマティズムの伝統でも、思考は行為の習慣を確立する機能として、世界と歴史のうちに埋め込まれている。解釈学的伝統とプラグマティズムの伝統は、理性の再概念化を目指す

穏健な思潮といえるが、ニーチェと後期ハイデガーからフーコーやデリダに至る、いっそう過激な思潮があり、こちらは理性の権威を根底から覆そうとする。<sup>99</sup>近代的「理性」概念の変更を迫る二つの思潮のうち、ハーバーマスは解釈学的—プラグマティズムの系譜に、ローティはニーチェからフーコーやデリダに至る系譜に、比較的近い関係にある。

まずハーバーマスから検討してみよう。ハーバーマスが「理性」概念の見直しの要だとみなすのは、「認識主観の脱超越論化」<sup>99</sup>である。つまり有限な主観は、世界を構成する自発性を失うことなく、世界のうちに埋め込まれる (situated) べきである。すると real と ideal の対立もまた世界内的な、つまり「社会实践のうちでの」対立になる。ideal は超越論的主観によって普遍的、必然的、叡智的に設定されるのではなく、社会实践において営まれる言語ゲームに埋め込まれた文法的制約である。その制約は、社会实践のうちで機能している限りで内在的であるが、社会实践の不可避的制約である限りで超越的である。

しかし「理性の脱超越論化」を通して獲得された「理性」と「合理性」概念は、解釈学—プラグマティズムの系譜にではなく、カントに結びつけて解釈される。なぜならハーバーマスは、次の4つの点で自らの立場とカントとの類似性を認めるからである。すなわち(1)世界の統一という宇宙論的観念 (カント) と共通の客観的世界というプラグマティックな前提 (ハーバーマス)。(2)実践理性の要請としての自由の理念 (カント) と説明責任をもつ行為者の合理性についてのプラグマティックな前提 (ハーバーマス)。(3)理念の能力としての理性の統体的運動 (カント) とコミュニケーション行為において定立される妥当性要求の無制約性 (ハーバーマス)。(4)すべての権利の最高審級である「原理の能力」としての理性 (カント) と可能的正当化の不可避的フォーラムとしての合理的論議 (ハーバーマス)。

これら4つの類似性について詳論する余裕はない。ここでは(1)に焦点を絞って、ハーバーマスの「理性」概念が「認識主観の脱超越論化」を経たカント主義に基づくことを明らかにしよう。(1)はカントの「世界の統一」に関する宇宙論的理念と、ハーバーマスの「共通の客観的世界」というプラグマティック



な前提に照応的關係があることを意味する。まずカントの理念であるが、カントは悟性と直観形式が関わる世界内的諸対象と、理性が関わる「世界の統一」を区別した。前者は「構成的」であるが、後者は「統整的」である。ハーバーマスはカント的な超越論的主観がもはや維持できないとしても、世界と世界内的なものとの区別は維持されるべきだと考える。ではその区別は如何にして維持されるのか。この証明は4つの観点から行われる。第一は世界の形式語用論的前提、第二は超越論的観念論を内在的實在論で置き換えること、第三は真理概念の統整的機能、第四は生活世界の脈絡において世界連関（Weltbezüge）が状況に埋め込まれていることである。

第一は、世界が独立して存在する諸対象の統体として實在し、また我々がそうした同一の世界を共有するという前提をどのように説明するか、という問題に関わる。「認識主観の脱超越論化」によって、カント的な理性と悟性の区別は妥当性を失うので、理性による統整的理念に依拠して、それを説明することはできない。ハーバーマスは社会实践における言語使用に、その根拠を求める。「自然言語に組み込まれた指示体系が、所与の語り手が可能的指示対象を形式的に予想できることを保証する。」<sup>24</sup>つまり共有された自然言語を使って社会实践を営む人びとは、実践的観点ないし行為者の観点から、我々に共有された客観的世界を前提せざるをえない。プラグマティズムに立脚すれば、客観的世界の實在性を保証する根拠など存在しないが、その實在性を疑うこと（デカルト的懷疑）はできない。疑念の対象になるのは、世界ではなく世界内的なものである。客観的世界の實在性は単なる実践的前提である以上、そこから世界内的なものの理論的性格について、つまり「可能的指示対象のための意味の實質的アプリアリ」を演繹することはできない。

第二は超越論的観念論を内在的實在論で置き換えること。ハーバーマスのいう客観的世界は、自然言語に組み込まれた指示体系の総体であるが、その外部に社会实践や自然言語の制約を免れた存在つまり物自体が存在するわけではない。物自体と現象の区別はなくなる。したがって客観的世界には、我々の社会实践と結びついた要因が常に既に組み込まれており、しかもそのような世界が

「実在」で語られる唯一のものである。これはパトナムの内在的実在論 (internal realism) と同じ主張である。<sup>23</sup>したがって「世界自体は『その』言語を我々に課さない。世界は自ら語らない…我々が事実として述べるものは、依然として、学習過程から結果し、可能的正当化の意味論的ネットワークに埋め込まれている。」<sup>24</sup>

第一と第二の、生活世界への還帰と内在主義への移行は広い意味で「プラグマティック」といえる。しかし第三の内在主義の観点からの超越への方向づけはカント主義的であり、ローティとの相違が顕著になる。まず真理の統整的機能について検討しよう。ハーバーマスによれば、世界と実在はどちらも全体性を表すが、真理と結びつくのは実在のほうである。つまり世界内的諸対象の全体が実在であり、その実在に関する推論的妥当性が「真理」に関わる。ここでハーバーマスはパースの実在概念をもちだし、それはカントの意味での統整的観念だという。この捉え方は正しい。というのはパースの真理概念は、探究共同体による真理探究が収斂したところで得られるであろう理想的合意、つまり理想的正当化ないし理想的な「保証された主張可能性」であり、実在とはその合意された言明の指示対象であって、その意味で実在は、探究共同体の歩みを究極的に制約する統整的理念だからである。しかしハーバーマスは、パースやパトナムと異なり、真理を合理的受容可能性に同化しない。これは真理と正当化の関係をめぐる問題であり、後ほど詳しく検討するので、ハーバーマスが両者を区別するという事実を指摘するに留めておく。この区別の含意は、真理は正当化過程を統整する理念だということである。

最後に第四の論点を調べてみよう。この論点は、いったん内在主義から超越の方向に進みながら、再び内在の立場へと還帰しようとするものである。まず真理と正当化の区別が、カントにおける物自体と現象の区別に相当するという点を確認することから始めよう。では真理と正当化の溝は如何にして埋められるのか。人びとが真理という理念に目覚めたとき、生活世界は脱中心化され、人びとは真理という統整的理念の下に集う普遍的共同体を構成する。その中において人びとは無際限に続く、常に開かれたフォーラムの一員となる。もしそ

うしたフォーラムが、アプリアリな理念として設定されるだけならば、それは硬直した理想であり、正当化の領域と乖離したままである。もしここに留まるならば、ハーバーマスはプラグマティズムとは無縁なカント主義者である。しかし真理に向けての脱中心化は、生活世界からの超越ではなく、生活世界のうちなる超越つまり「内在的超越 (immanent transcendence)」である。真理という理念の下でのフォーラムは依然として生活世界的フォーラムであり、それに固有の実践的确实性への要求と仮言的な妥当性要求に制約されているのであり、この点で真理と正当化のギャップはプラグマティックに閉じられる。言語の指示対象は、脈絡から独立な実在ではなく、生活世界内的実在であり、その点で内在的実在論が不可避的になる。

ハーバーマスのヴィジョンでは、合理性や理性は、真理という統整的理念の下で営まれるフォーラムを規制する、形式語用論的諸条件やそれを行行使える能力という観点から説明されることになる。しかしローティは、ハーバーマスをカント的な主観中心的理性の立場と、合理性や普遍的妥当性を放棄する立場（ローティの立場）との不満足な妥協の産物とみなす。ハーバーマスが残存させた弱い形の「無制約性」は希薄すぎて、我々の行為を導くことができない。「無制約的であるほど不可知的であり、不可知的であるほど希薄である。」<sup>29</sup>

ローティは「合理性」と「理性」の使用を放棄しようとする。しかしそれに対しては「自己言及的矛盾 (self-referential contradiction)」という批判が付き物であり、またこの批判をクリアしても、「合理性」と「理性」の代わりに何をもって来るかが問題になる。前者の問題から考えてみよう。この批判によれば、「合理性」と「理性」の否定は、自己言及的に、その否定自体を不合理で、非理性的なものにするという自己矛盾を犯している、「合理性」と「理性」は自己矛盾なしには否定できない。この批判は、「合理性」と「理性」を支持する者と支持しない者は、各々の理由を「合理性」と「理性」という同じ土俵の上で論議しなければならない、という前提に基づいている。この批判に対するローティの応答は、端的に、彼は「合理性」と「理性」の支持者と同じ土俵の上で、それらの放棄を唱えているのではなく、土俵をずらしているのだ、ということが

できよう。その土俵には「合理性」と「理性」という抽象的概念は登場せず、それらの語句の意味の解明は、社会史家や科学社会学者に委ねればよい、というのである。

そこで問題は、その土俵とは何かである。ハーバーマスやマッカーシーといった批判理論家にとって、「合理性」、「理性」、「真理」は各々の本質をもち、すべての人びとは、その本質に帰依して普遍的フォーラムを構成すべきである。「合理性」と「理性」の批判者もまたそのフォーラムの一員である他なく、これを否定すれば「自己言及的矛盾」に陥る。このモデルでは、合理的思考者が普遍的フォーラムを形成し、真理という統整的理念に基づいて、「虚焦点 (focus imaginarius)」へと向けて収斂するという像が描かれる。これに対してローティが用意する土俵では、まず「真理」ではなく「幸福」が置かれる。つまり「真理に向けての探究」ではなく、「人間の幸福の増大」が置かれ、政治と科学を区別する基準が消失し、次に普遍的フォーラムが否定される。すべてのフォーラムはローカルであり、ローカルなフォーラム同士の出会いによる「地平の融合」から生じたフォーラムもまたローカルである。さらにフォーラムを営むための理想的条件も存在しない。「認識は自然種をなさない。」<sup>29</sup> いわば「何でもかまわない (Anything goes)」のである。

(2)ハーバーマスとローティが用意する土俵は、真理 VS 幸福、普遍性 VS ローカルティ、理想的思考の客観的基準 VS “Anything goes” というように、著しく対照的である。このことは、近年「真理」をめぐって展開された、相互の応酬を見ても明らかである。<sup>29</sup> この応酬は多面的なものであって、その詳細な検討は別稿の課題とし、ここでは真理と正当化めぐる両者の対立を瞥見するにとどめる。

さてこの問題についてのローティの基本方針は、前述のように、「真理」を廃品処理に回すことである。<sup>29</sup> 「真理」は無時間的であるが、「正当化」は時間的である。「時間  $t_1$  において言明  $S$  は真であったが、時間  $t_2$  においては偽になった」は無意味であるが、正当化については、この表現が成り立つ。しかしこれは、「真理」が行為を制御するには希薄すぎる概念であることを示す。ローティ

が認める「真理」の唯一の用法は「警告的用法 (the cautionary use)」である。つまり言明Sは、現在、共同体において正当化されているが、いずれ不当なものとなるかもしれないという警告を「Sは真ではない」という表現で発している。「真理」が警告以上のものではないとすると、残るのは「正当化」である。現代のプラグマティストには、「正当化」の問題に関して大きく二つの立場がある。一つはパトナムの立場であり、これは「真理」を理想的正当化あるいは理想的な「保証された主張可能性」と解釈する。この立場はパース以来の系譜にあるとあってよい。もう一つはローティの立場であり、これは「真理」を警告的用法に限定し、さらに「正当化」を徹底的に脈絡主義的に捉える。つまり「正当化」とはローカルな対話的共同体において、ある人物Pの発した言明Sが、その共同体の仲間集団に対して受容されることである。

この主張は、パトナムやハーバーマスにとって、単なる相対主義である。実際ハーバーマスはローティ的脈絡主義を、メンタリズム・パラダイムにおける懐疑主義に対応する立場とみなしている。<sup>99</sup>ハーバーマスの立場からみると、差し当たり、ローティには次のような問題があるだろう。ローカルな共同体においてPの言明Sがその仲間集団に正当化されているとして、正当化共同体を脱中心化的に拡張するための理由はどこにあるか。小論の最後に、この問題をめぐるハーバーマスとローティの対立点を瞥見しておこう。

まずハーバーマスの立場を検討する。ハーバーマスは、行為者レベルとディスクルス・レベルを分ける。行為者レベルで人びとは強い行動確実性への要求をもっており、知識であるという確証がないものであっても、今、ここでの必要のために、それを無条件的な真理だとみなす。このレベルでは一種のドグマティズムが優勢であり、正当化共同体の脱中心化的拡張の必要も乏しい。逆にディスクルス・レベルでは、行動確実性への要求は括弧に入れられ、可謬主義的にディスクルスが進行する。「真理」が現実的意味をもつのは後者においてである。つまり後者において、人びとは「正当化を超越する (rechtfertigungstranszendent)」<sup>100</sup>真理に導かれて、正当化共同体を脱中心化しようとする。しかし行為者レベルからディスクルス・レベルへの超越は、社会

実践の埒内での超越である以上、二つのレベルは相互浸透している。まず行為者レベルにおける強い行動確実性の要求は、ある言明を無条件的に真だとみなすことを余儀なくするが、この「無条件的に真」という性格が、ディスクルス・レベルにおける真理の無制約性に反映される。逆にディスクルス・レベルでの可謬主義は、行為者レベルでの思考のドグマティズムを緩和する。ハーバーマスの基本的戦略は、人間が生活世界のうちに常に既に埋め込まれているという現実を受け入れつつ、その世界には超越の契機が常に既に内在しているとし、それを理想化的に明示することだと解される。ただしその超越は生活世界における超越であり、この点でプラグマティズムに歩み寄っている。

これに対してローティは、ハーバーマスによる行為者レベルとディスクルス・レベルの二層化を認めない。パース以降のプラグマティズムの伝統では、信念は「行為の習慣」であり、ディスクルス・レベルもまた、もう一つの行為脈絡、「自他の習慣を比較対照させて、いっそうよい行為の習慣を獲得しようとする行為脈絡」<sup>63</sup>である。プラグマティズムという視角から、ローティの指摘は正しい。二つのレベルの二層化は、ハーバーマスのうちに残る合理主義の遺物である。ただしローティのような徹底した脈絡主義者・歴史主義者にとって、二つのレベルの二層化を解体した後に、正当化共同体を脱中心化しようとする契機を如何にして説明するかが問題になる。ハーバーマスは、その契機を言語の深層構造や合理性の本質のうちに見出そうとするが、ローティのような反本質主義者は、当然ながら、これを否定する。むしろ人間は、お互いに、自らの信念を相手に対して正当化する必要を感じない「相互に排他的な集団」になる傾向がある。では排他的な集団を超えて正当化共同体を拡張する要求はどこから生じるか。(a)それは自分の信念を首尾したものにしようとする要求、(b)自分の仲間の賞賛を得ようとする傾向、(c)好奇心である。<sup>63</sup>ここで(a)は単に、脳が一定以上の不整合性に耐えられないことから生じ、そこから(b)のように、整合性を拡大して、自尊の念を確認しようとすることになる。ローティは次のようにも述べる。すなわち正当化の共同体を拡張しようとすることは、「普遍性という抽象的希望によるよりも、むしろ後退の具体的恐れ」<sup>64</sup>、いわば「過去の後悔か

らの逃走」によるものである。しかも「20世紀における西洋の高度な文化」に生きているというラッキーな偶然が、我々の要求を支えている。

以上を要約すれば、相互的対話によって結びつく包括的共同体への指向性は、ハーバーマスにとって、コミュニケーションの深層構造に埋め込まれた普遍的理念に基づくが、ローティにとっては、畢竟、ラッキーな偶然である。だとすれば、ローティは包括的共同体の敵に対して、自らの立場を正当化できるのだろうか。答えが「正当化できない」となることは明らかである。敵は「我々の仲間」ではないのである。「正当化できない」とすれば、何が可能か。それは教育、特に「感情教育 (sentimental education)」<sup>69</sup>、つまり我々の仲間および潜在的仲間、場合によっては敵に対しても、我々と同じ営みに参加する感情を植え付ける教育である。近代教育の伝統では、この種の教育はインドクトリネーションとして否定され、批判的思考 (critical thinking) の教育が尊ばれる。ハーバーマスとともにローティも、この教育を否定する訳ではないだろう。両者の相違は、批判的思考の教育を支持する理由にある。ハーバーマスにとって、その教育は批判的思考の普遍性を基礎として支持されるだろうが、ローティにとっては、我々が「感傷的な西洋のリベラル、ソクラテスとフランス革命の嫡子」<sup>66</sup>だから、という他ない。

以上小論では、20世紀プラグマティズムの展開という視角から、近年のローティ—ハーバーマス論争の一端を考察してきた。両者は形而上学—認識論—言語哲学という西洋哲学の展開過程を是として認め、20世紀における言語論的転回を語用論的転回と解釈することにも同意する。つまり両者は、歴史のなかで営まれるコミュニケーション的状况を余儀ない出発点とする。しかしハーバーマスは、その状况の脱脈絡的理想化の可能性を追求することによって普遍主義的、合理主義的伝統を堅持しようとするのに対して、ローティは徹底した脈絡主義、歴史主義、特殊主義に固執する。ハーバーマスにとってローティは、「真理のノスタルジー (nostalgie de la verité)」を引きずった現代の懐疑主義者であり、ローティにとってハーバーマスは、カントの亡霊に取り憑かれた合理主義者である。

ハーバーマスとローティの対立には、かつて我々がパトナムとローティの対立のうちに看取した「理論か詩か」という二者択一が、再び顔をのぞかせている。<sup>64</sup>しかし、このような二者択一は、果たして妥当なのだろうか。我々の見解では、ハーバーマスの普遍主義、合理主義はなお強すぎる。形式的語用論の分析から、真理や合理性の構造の普遍的本質が導出できるとは思われない。またローティによる「強い詩人 (strong poet)」の称揚は、実際は「真理のノスタルジー」つまりネガティブな合理主義の産物である。つまり両者の対立の根底には、共通の合理主義的前提があり、そこから逆に「理論 (ハーバーマス) か詩 (ローティ) か」という二者択一が帰結するともいえる。その意味で、この二者択一を如何に見直すかが、現代の理論的課題である。ただし、これは稿を改めて論じるべき課題である。

#### 注

- (1) Ralph W. Sleeper, "Vanishing Frontiers of American Pragmatism: Two Dogmas of Idealism", *Pragmatism: Modernism to Postmodernism*, ed. by R. Hollinger and D. Depew, Praeger, 1995.
- (2) Bode H. Bode, "Realism and Pragmatism", *Journal of Philosophy*, Vol. III, 1906, reprinted in *Dewey and His Critics*, ed. by Sidney Morgenbesser, Journal of Philosophy, Inc., 1977.
- (3) Cf. Bruce Kuklick, *A History of Philosophy in America: 1720-2000*, Clarendon, 2001, pp. 202-203.
- (4) H. O. Mounce, *Two Pragmatisms*, Routledge, 1997.
- (5) 拙論「自然主義的プラグマティズムの展開」『理想』第669号, 理想社, 2002年。
- (6) パトナムのローティ観については、例えば Putnam, *Realism with a Human Face*, Harvard University Press, 1990, ローティのパトナム観については例えば Rorty, "Hilary Putnam and the Relativist Menace", *Truth and Progress (Philosophical Papers, Vol. 3)*, Cambridge University Press, 1998, pp. 43-62.
- (7) Rorty, *Ibid.*, p. 62.
- (8) Cf. H. Putnam, *The Many Faces of Realism*, Open Court, 1987.
- (9) 例えばローティは、ニーチェとルイスについてこう述べる。「ルイスのプラグマティズムとニーチェの所謂『遠近法主義』は次のことを強く主張する単に二つの異



なった仕方である。それは、もしプラトンからカントへと、真理の対応説から表象連関の客観性の理論に、ひとたび踏み出すならば、我々は、我々自身以外の何のものにも責任がないということである。もし正しく表象されることを待っている客観的世界についての『実在論的思想』が、ひとたび失われるならば、功利主義、快楽と力 (Genuß und Macht) 以外の何ものも残らないということである。」(„Heidegger wider Pragmatisten“, *Neue Hefte für Philosophie*, 23, 1984, s.2.

- (10) ハーバーマスによるニーチェ以降の思想的系譜への評価については、*Der philosophische Diskurs der Moderne*, Suhrkamp, 1986 を参照のこと。またローティのパーズへの評価は次の文章に端的に表れている。「パーズのプラグマティズムへの貢献は、単にそれに名前を与え、ジェイムズを触発したことであった。パーズ自身は思想家のなかで最もカント主義者であり続けた。」(*Consequences of Pragmatism*, University of Minnesota Press, 1982, p. 161.)
- (11) Vgl. J. Habermas, *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Suhrkamp, 1983, s. 24.
- (12) Cf. Richard Rorty, *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press, 1989, Chap. 4. and “Habermas and Lyotard on Postmodernity”, *Essays on Heidegger and Other Essays*, Cambridge University Press, 1991, pp. 164-176.
- (13) R. Rorty, *Philosophy and Social Hope*, Penguin Books, 1999, p. 234.
- (14) Richard Bernstein, *Philosophical Profiles: Essays in a Pragmatic Mode*, Polity Press, 1986.
- (15) Vgl. J. Habermas, *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, s. 127ff.
- (16) J. Habermas, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, ss. 242-243.
- (17) *Ibid.*, s. 243. なおデリダとローティの思想的関わりについては、次を参照のこと。Chantal Mouffe (ed.), *Deconstruction and Pragmatism*, Routledge, 1996.
- (18) Charles Taylor, *Source of the Self*, Oxford University Press, 1989, p.86.
- (19) 理性を覆そうとする思想の系譜については、以下を参照のこと。Richard Bernstein, “The Rage against Reason”, *The New Constellation: The Ethical-Political Horizons of Modernity/Postmodernity*, Polity Press, 1991, pp. 31-56.
- (20) J. Habermas, “From Kant’s ” Idea” of Pure Reason to the ” Idealizing” Presuppositions of Communicative Action: Reflections on the Detranscendentalized ” Use of Reason”, *Pluralism and the Pragmatic Turn: The Transformation of Critical Theory*, ed. by William Rehg and James Bohman, The MIT Press, 2001, p. 12.
- (21) *Ibid.*, pp. 14-15.
- (22) *Ibid.*, p. 17.
- (23) ハーバーマスのパトナム論としては、次を参照のこと。J. Habermas, „Werte und

- Normen: Ein Kommentar zu Hilary Putnams kantischem Pragmatismus“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 48, 2000.
- (24) “From Kant’s “Idea” of Pure Reason to the “Idealizing” Presuppositions of Communicative Action: Reflection on the Detranscendentalized”, p. 18.
- (25) *Ibid.*, p. 20.
- (26) Richard Rorty, “The Ambiguity of ‘Rationality’”, *Pluralism and the Pragmatic Turn: The Transformation of Critical Theory*, ed. by W. Rehg and J. Bohman, p. 44.
- (27) *Ibid.*, p. 48.
- (28) 近年の応酬として、次を参照のこと。J. Habermas, „Wahrheit und Rechtfertigung: Zu Richard Rortys pragmatischer Wende“, *Wahrheit und Rechtfertigung: Philosophische Aufsätze, Suhrkamp*, 1999. R. Rorty, “Universality and Truth”, *Rorty and His Critics*, ed. by Robert B. Brandom, Blackwell, 2000.
- (29) ローティの「真理」をめぐる所論は “Pragmatism, Davidson, and Truth”, *Objectivity, Relativism, and Truth*, Cambridge University Press, 1991 を嚆矢とする。ローティの真理観はデイヴィドソンに負うが、興味深いことに、デイヴィドソン自身はローティとは異なり「真理」を真面目に受け取っている。Cf. ex. D. Davidson, “Truth Rehabilitated”, *Rorty and His Critics*, pp. 65-73.
- (30) J. Habermas, *Wahrheit und Rechtfertigung*, s. 243.
- (31) *Ibid.* s. 264.
- (32) R. Rorty, “Response to Jürgen Habermas”, p. 57.
- (33) R. Rorty, “Universality and Truth”, p. 15.
- (34) R. Rorty, “Response to Jürgen Habermas”, p. 61.
- (35) R. Rorty, *Truth and Progress (Philosophical Papers, Vol. 3)*, Cambridge University Press, 1998, p. 176.
- (36) R. Rorty, “Universality and Truth”, p. 20.
- (37) 拙論「自然主義的プラグマティズムの展開」, 55ページ。